

普通のオジサンになりたい

松本 侑壬子・ジャーナリスト

冤罪で29年間も「塀」の中で過ごし、やっと出てきたときには49歳の中年男になっていた—この映画は、「桜井ショージ（昌司さん）、63歳。杉山タカオ（卓男さん）、64歳」がその後辿った類稀な14年間の記録である。

二人は1967年、「布川事件」（茨城県）と呼ばれる強盗殺人事件で別件逮捕、偽りの自白で犯人に仕立て上げられ、無期懲役が確定した。だが、獄中からあくまでも無罪を主張し続け、1996年に仮釈放。その後も「犯人ではない」と叫び続け、2009年に再審が決定し、2010年夏に再審公判が開始された。この映画は、ショージとタカオの仮釈放後の14年間の本当の自由への闘いを追う。

—と書くと、何やら難しい人権闘争や複雑な裁判映画と思われるかもしれない。だが、心配ご無用。井手監督自身、最初は事件のこともよく知らず、彼らが刑務所の門から出てくる姿を、ただ「頼まれて」カメラを回しただけだった。

この映画があっけらかんと突き抜けて、生き生きとした人間記録となっているのは、当人二人の魅力と共に、監督自身のこうした姿勢によるのだろう。本当は法的にも制度的にも深刻な問題を内包している重大事件なのだが、理屈から入っていない。ショージとタカオにひたすら密着して、ゼロから出発した14年間のありの

ままを追う。隠すもののない潔さが撮る者・撮られる者双方にある。だから、観客が共感し味方になるのだ。

ショージは背が低く、タカオは180cmののっぽ。ショージは如才なく弁舌さわやか。タカオは話下手。ショージは身なりはあまり気にしないが、タカオはおしゃれ。一緒に犯人にされたが、二人はむしろ対照的だ。それぞれにとって、長い獄中生活の間の社会の変化は戸惑いの連続だ。電車の自動券売機やカード式公衆電話を前に立ち往生するタカオ。廃屋同然になってしまった自宅を、めげずにこまめに手を入れて住めるように作り変えるショージ。「日々、飯食って、風呂入って…。なんて幸せなんだろうって、いつも思うよ」とあくまでも前向き。時にユーモアさえ交えた日常会話のようなつぶやきからも、自由のうれしさ、その裏の冤罪の恐ろしさが伝わってくる。

初めは浦島状態で呆然としていた二人は、数年後には念願通り伴侶を得て温かい家庭を築く。骨身を惜しまず働き、一家を支える仕事を得る。周囲の偏見、仕事探しや生活の苦勞などきれいごとでは済まない困難を乗り越え、「普通のオジサンになりたい」願いを強い意思の力で貫いた。

井手監督はこれが長編記録映画第1作。問題意識に基づいて真実を聞き出すというよりは、二人にどこへでもついて歩き黙ってつぶやきを聞きながら、長い空白の後の社会復帰に奮闘する姿を至近距離から見守り続けた。「決して諦めない生き方に、逆にこちらが励まされた」と。一時は尊敬する羽田澄子監督の助監督として働いたこともある。2010年度キネマ旬報ベストテン文化映画第1位。

『ショージとタカオ』

ドキュメンタリー映画（158分）／井手洋子監督

©「ショージとタカオ」上映委員会

